

【溺愛SEX】鉄仮面SPの理性が嫉妬で決壊。

十三年守り続けたお嬢様を最奥までトロトロに墮とす、切なく甘い執着愛

サンプル（一部抜粋）

「麗華様。そろそろ起きて下さい。遅刻してしまいますよ。」

カーテンが開かれる音、眩しい朝日が閉じた瞼を貫通して届く感覚：

また今日も一日が始まったのね：

そう思いながら私はゆっくりと瞼を開けた。

「おはようございます。麗華様。」

二コリともせず、無表情のまま軽く頭を下げて挨拶をするのは、私の専属SPの氷室。

年齢は四十歳で眉間に皺が刻み込まれた強面の男性。

彼に出会ったのは私が七歳だった頃。

笑う事も無ければ、雑談にもほとんど応じず冷静で冷酷で淡々と業務をこなすだけのロボットのような男性：。

私はそんな彼に：出会った直後から恋をしている。

「：氷室。」

「はい。」

「…好き。」

「…早く準備をしてくださいますか？遅刻してしまいますよ。」

…はあ。今日も相手にされてない。

眉一つ動かさないんだもん。一切、何も響いてないのが表情から分かる。

「…氷室の意地悪。」

拗ねるようにそう言っても氷室の表情は変わらなかった。

それどころか

「…子供には興味がございませんので。」

なんて言われる始末。

（中略）

「和樹君、おはよう。」

「おはよ！今日さ、サークルの飲み会あるじゃん？また来ないつもり？」

和樹君とは同じサークルに入っているんだけど…私に一目惚れしたらしく、しつこく好意を伝えてくる。

「…相手にされてないんじゃないかなかったっけ？」

「それは…そうだけど…」

「飲み会くらい一緒に行こうよ。一回でいいから一緒にお酒でも飲もう。」

絶対に楽しませるから！」

和樹君の言葉がグサツと心に刺さった。

片思いはしんどい、どうせ…相手にはしてもらえない。

そんな事は痛い程分かっている。

「…氷室です。」

「あ、氷室…あのね、えっと…サークルの飲み会が今日あるらしいんだけど…」

行っても大丈夫？」

「…飲み会ですね。」

帰りに迎えに行きますね。」

淡々とそれだけを伝えられ、電話が切れた。

興味を持たれていない事は分かっていたけど、なんというか…思っている以上だった。

そうして迎えた夕方…

「会場までお送りいたします。」

やっぱり変わらない表情…隣に男の子がいるのに、それすら気にしていないみたい。

和樹君は勢いよく私の手を引いて走り出した。

「いいじゃん！全然相手にしてない顔だったでしょ？」

俺にもチャンスくらいちょうだい。ちゃんと、守るから。」

まっすぐに目を見てそう言われて、氷室の態度に傷付いた心が少し和らいだ。

「…今日だけ、だよ。」

（中略）

確認すると氷室からメッセージが届いていて、ドキッと胸が高鳴った。

『飲み過ぎないように注意してくださいね。』と淡々としたメッセージだった。

私と和樹君が手をつないでいた事も見ていたはずなのに…本当に仕事だから私の近くに居るんだ…。

そう思うと悲しくて、もどかしくて…泣きそうになった。

「…ううん、今日は飲もう！なんか色々飲んでみたくなっちゃった！」

氷室へ連絡を返さず、和樹君が選んでくれるカクテルを次々と流し込んだ。

「麗華様」

低い声が聞こえて目を開けた。

そこにはなぜか氷室が居て、和樹君の肩に頭を乗せて眠る私をいつもと変わらない表情で見下

ろしていた。

「なんで…ここに…」

「飲み過ぎです。」

申し訳ないですが、麗華様は連れて帰ります。」

(中略)

「…お風呂に入ってください。」

メイドに伝えておきますので。」

部屋に入ってそっけなく地面におろされ、いつもと変わらないトーンでそう言われた。

「…嫌。氷室が入れて。」

「…はい？」

「…女として見てないんだよね。氷室が入れて。」

その瞬間、氷室の眉間に皺が入った。

十三年間、変わらなかつた表情が一瞬歪んだ瞬間だった。

「…もう氷室なんて嫌い！相手にしてもらえないんだもん。」

もう私、和樹君と付き合う…」

「…は？」

次の瞬間、氷室の低い声が響いて…手首をぎゅっと捕まれた。

「な、なに…よ…」

「…気に食わないですね。この匂い。」

あの男の香水の匂い…。風呂に入れて差し上げます。」

「…どうしました？麗華様が望んだんでしょう？」

僕にお風呂に入れてほしいと。」

淡々と…氷室の指が私のシャツのボタンへと伸びる…躊躇する事なく外されていくボタン…

「…っ、恥ずかしい…よ…」

「ならば目を瞑っていてください。」

早くその匂いをどうにかしたいので。」

(中略)

ボディークリームをつけた氷室の手は私の首をなぞった。

氷室は首から鎖骨へと手を滑らせ、ゆっくりと丁寧に…乳首へと指を滑らせた。

「っ、あ…は…」

指がそっと乳首を上下に行き来する度に、勝手に声が漏れた。

「…どうしました？」

氷室は私の顔を覗き込んで、反応を確認するかのようにそう聞いてきた。

「氷室…そこ…きもちい…」

氷室はスッと私の足元に屈み、優しくクリトリスをなぞってきた。

「っ、あ…あ…」

激しくはない、触れるか触れないかの強さで上下に擦られるだけに、なのに気持ちよくて、腰のあたりがビクビクと勝手に震えていた。

「…ここも綺麗にしておきましょうか。」

（中略）

部屋に入り、ドアを閉め…氷室は私をベッドに座らせた。

「はあ。やっと綺麗になった。」

氷室はいつもの敬語ではなく、私を冷たく見下ろしながら低く言い放った。

「氷室…？」

「…僕の事、嫌いになるんでしたね。」

どうぞ、勝手に嫌ってください。

出来るものなら、ですが。」

氷室は吐き捨てるようにそう言うと、強引にキスをしてきた。

「ん…ふ…あ…」

熱い舌の感覚に脳が焼かれていくみたい…

身体をしつかりと支えられたまま……ゆっくりとベッドへ押し倒された。

氷室の大きな手が私のパジャマへと落ちていく……

片手で簡単にボタンを数個開けられ、服の隙間から少しカサついた手が忍び込んでくる。大きくて、タコがあつて、傷も沢山ある手……

「……っ、あ……は……あ……」

「もつと……聞かせてもらいますからね。」

「電気……消して……恥ずかしいから……」

「もう二度と、こうして出来ないんですから。」

今夜だけは全て見せて。」

氷室の葛藤するような声が響いて……そのまま氷室の顔が私の股の間へと近づいてきた。

「や、だめ……」

「……そうですか。」

私の小さな拒否の言葉など無かつたかのように、氷室はそのまま舌を伸ばして私のクリトリスをじゅるっと音を立てて吸った。

「ああっ、あ……や……っん……あああ……♡」

（中略）

「……痛みがあれば言ってくださいね。」



氷室は淡々とそう言うのと、私の中にゆっくりと太い指を入れてきた。

「んあっ、あ…あああ…」

指が中をゆっくりと進んで行く感覚は…痛みよりも快感の方が大きかった。

「一本増やしますよ。」

氷室は私の中に指を二本入れて、グチュグチュとさつきよりも激しい音を立てながら抉り、長い舌で見せつけるようにクリトリスを舐めあげた。

「ひあっ、ああああっ…や、まって…ああ、

また変に…なっちゃう…っっ」

「いいですよ。忘れないで下さいね。

僕に犯されているこの時間を…」

（全容は製品版にて）